

日本茶俗史の研究(上)

吉 村 亨

はじめに

「茶湯」、この言葉を提示されると、大半の人々は「ちやのゆ」と読んでしまうのだが、本稿が扱う「茶湯」は「チャトウ」と訓じる。それでは「ちやのゆ(茶の湯)」と「チャトウ(茶湯)」とは、何が違うのか。これが先ず明らかにされなければならない。茶の歴史と文化に関する基本的な問題でもある。

いうまでもなく、「茶の湯」とは、今日の茶道を形成する前史として、侘びや寂び(さび)という都市的美意識に象徴される「草庵」での寄合いと喫茶に集約され、極めて高い精神的世界に属するものである。この「茶の湯」に対して、「茶湯(チャトウ)」というのは、儀礼的・習俗的な世界に属する。

「茶俗」という言葉がある。これは日本語にはないが、中国では、各民族によって異なる茶の栽培から製法、飲み方の違いや、茶にまつわる様々な逸話・伝承、民間信仰や禁忌など、実に多様な世界を総合した概念とし

て用いられており、広く茶の風俗を表現する言葉として理解されている。中国の茶文化を集約する杭州の茶葉博物館でも、展示室の一つに「茶俗室」があり、婚礼にもなう茶の習俗などが展示されている。「茶俗」とは、中国の「多種・多様な茶の民俗」を意味する言葉と理解していいだろう。しかし、こうした中国の「茶俗」概念を、そのまま日本の茶文化世界に持ち込むことはできない。

日本の場合、茶の民俗的な事象の研究は多くはないが、千葉徳爾氏をはじめとして、『茶の民俗学』を著した中村羊一郎氏、振り茶に関する研究で知られる漆間元三氏などが存在する。しかし、筆者が目標とする世界は、これらの業績とは異なり、正月や盆月の歳事で用いられる茶や、人生の通過儀礼ともいうべき出産や育児、婚姻、葬送といった儀礼のなかに登場する茶のあり方と、そうした茶の習俗を受け容れている社会的認識に関する究明である。今のところ単独での史料蒐集など、作業的には大きな限界があるものの、こうしたライフサイクルにおける茶の習俗を「茶俗」と定義した上で、幾つかの成果を公にしてきたが、未着手であった日本の「茶俗」に関する歴史的考察をおこなったのが今回の論稿である。本稿は、「茶俗」という言葉を使い、その歴史を明らかにする、日本の茶文化史研究では初めての試みとなるであろう。

この日本の茶俗世界を象徴する言葉が、「茶湯(チャトウ)」である。

文献史料に「茶湯」という語句が登場する最初の例は、おそらく平安時代初期の『僧空海奉獻表』⁽²⁾にみる「茶湯坐来」であろう。鎌倉時代、宋代の中国から将来した調製法による茶を古来の桑と合体させ、多くの本草をうわまわる「養生の仙葉」として流布させようとする意図をもって著された栄西著『喫茶養生記』の「引飲時、桑湯・茶湯不飲則生種々病。茶功能上巳記畢」という一文には、「桑湯」と併記された「茶湯」という言葉が

見えている。点茶法によるこの「茶湯」も、平安期の「茶湯」ともども喫茶(飲茶)の世界に属しており、本稿の主題である「茶俗」としての「茶湯」とは異なっている⁽³⁾。本稿が考察の対象とした「茶湯(チャトウ)」とは、具体的には、仏・神事の執行や忌日の法要などにもなつて催される供茶や献茶あるいは茶の振舞いであり、産育・婚礼・葬礼といった通過儀礼や正月・盆月の歳事などに登場する茶、いわゆるライフサイクルにおける茶の習俗のことである。

中世の茶は、宗教的な世界と深く関わっており、様々な儀式や行事あるいは法事や法要といった世界に多用されるが、そうしたなかで、十五世紀に入ると「茶湯」という言葉が出はじめる。まず、こうした茶俗の歴史を検証することから始めたい。

〔註〕

(1) ライフサイクルにみる「茶俗」(通過儀礼・歳事における茶の習俗)について、文化庁編『日本民俗地図』解説・資料や県市町村史の類から、近・現代に継承され今も行われている該当事例を蒐集し、それを産育・葬送・婚姻儀礼、正月・盆月などに分類して幾つかの論考に纏めてきた。その主だった論稿は、以下のとおりである。

「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」(『比較日本文化研究』第八号 二〇〇四年十一月)

「中国・日本の婚礼茶俗と文化コミュニケーション」(『人間文化研究』第十七号 二〇〇六年三月)

「歳時の茶俗と供茶・施茶の世界」(『人間文化研究』第十九号 二〇〇七年三月)

なお、これらの論稿に先立って、日本の茶俗を理解するうえで是非とも必要と考え、丁世良・趙放主編『中国地方志民俗資料匯編』(全六巻、北京図書館出版社刊)の中南・西南・華東・華北・東北・西北巻(計九冊)に収載された明代・清代・民国代の資料から主な茶俗関係記事を抽出し、日本との比較など、若干のコメントを付して中国の茶俗事例を

検証をしたのが以下の論稿である。参考にされたい。

「中国中南部の茶俗」(『人間文化研究』第一号 一九九九年十二月)

「中国西南部の茶俗」(『人間文化研究』第二号 二〇〇〇年三月)

「中国華東域の茶俗」(『人間文化研究』第四号 二〇〇〇年十二月)

「中国華東域の茶俗」(『人間文化研究』第五号 二〇〇一年三月)

「中国華北・東北・西北域の茶俗」(『人間文化研究』第六号 二〇〇一年七月)

また、これらの論稿を作成する途次、中国と韓国の学会から国際シンポジウムでの研究発表を求められ、その成果として稿を成したのが以下の論稿である。

「茶文化研究の新視点」(『第5届国際茶文化検討会論文選集』一九九八年十月)

「THE HISTORY OF TEA CULTURE AND CUSTOMS IN JAPAN」(『韓国茶学会誌』第六卷第二号 二〇〇一年十月)

(2) 『平安遺文』四三九六号

(3) ここていう「茶湯」を、「ちゃとう」ではなく「ちゃのゆ」と訓じている誤りがまま散見される。たとえば天保十
五(一八四四年)「梅園院法事茶湯一卷」(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録」データベース、国書所在…金沢
市加越能)の史料名が「ばいえんいんほうじちやのゆいっかん」、弘化二(一八四五年)「梅園院様百回御忌御茶湯留」
(同上)も同様「ばいえんいんさまひゃつかいぎよきおんちやのゆとめ」とされ、いずれも「茶道」に分類されている
ことなどは、その一例である。

第一章 宗教儀礼と茶

入唐帰朝僧らによって我が国にもたらされた喫茶の風は、平安貴族らに受容され、嵯峨・淳和・仁明朝を中心に、いわゆる「唐風茶」としての隆盛をみせた。一方、こうした茶文化は、有力寺院のなかにも取り込まれ、「煎茶威儀供」や季御読経における衆僧への「引茶」といった儀礼としてその存在感を見せたものの、やがて漸衰しながらも平安末に至ったことは周知に属しているが、点茶法が将来され新たな茶文化が形成された中世以降においても、茶は多彩な宗教儀礼と密接な関係を持ち続けた。

中世の茶に関する史料を探してまず気付かされることは、様々な宗教儀式・行事や法事・供養などに茶が多用されていることである。平安時代以来、寺院で行われていた季御読経における「引茶」の儀は、鎌倉時代にも継承され、その種の記載は日記などに散見するが、所見の範囲でいえば、十四世紀半ば以降、寺社での儀式や行事に、茶が多様な姿を見せて登場する。それらの主だった事例を、宗教儀式・行事と忌日などの法事や法要などに分けて概観しておきたい。前者の事例を一覧したのが表1「宗教儀式・行事などにみる茶」である。

『金沢文庫古文書』年未詳〔貞和二(一三四〇年以前)十一月十日付「禪爾書状」に「来月大師講、於当所者茶湯沙汰も無用意候」とあり、「大師講」など寺社の行事に茶が用いられていたことがわかるが、後述するように、この史料は「茶湯」という言葉の早期の事例でもある。ついで、『法隆寺祈雨旧記』には龍田宮で催された「雨乞」神事(1)のなかにも、茶が多様な姿をみせて登場している。以下が、その主だった記事である。

観心三(一三五三年)

七月二十三日条「於龍池、学衆一円大般若經
転読有立願、堂家皆參、極楽寺タリ、茶在之、開結法用如、
昨日也、而二末龍池上ヨリ黒雲出来シテ、大雨半時之程下、以外大雨也」

八月一日条「於龍田宮、龍王經三百卷読立、一万卷心經同音禅字皆參、先度社參一両度二初日春蓮房
次度經聖春行房茶ヲ被進之間、今日經聖ノ方へ寺ヨリ
茶二斤給了年云之沙汰」

八月十二日条「於龍池、山籠衆最勝一部、同講講問十座、難信解品転読八月八日立願
成就課之、当行衆山へ入テ、学衆ヲケタミ□茶酒等云々」

康安二(一三六二年)

八月一日条「礼堂千卷読経禪学、
会向、東郷若物西郷衆ニ茶ヲケタム云々」

二日条「礼堂千卷読経禪学、
会向、西郷若物東郷衆ニ茶ヲケタミ云々」

史料文中の学衆・東郷若物西郷衆・西郷若物東郷衆が所役とした「ヲケタミ」「茶ヲケタム」「茶ヲケタミ」については、いまのところ理解できていない。この雨乞に関するものだろうか、『播磨国鶴荘史料』応永三十二(一四二五)年四月二十七日付「法隆寺住師年会衙記録」に記載された応永三十年「龍田宮祈祷之時下行物」に「廿文新代茶湯ノ時也、一升寺水汲之」とみえている。雨乞神事にともなうて催された「茶湯」を沸かすのに必要とされた薪の代金二〇文と水一升の下行の記録とみるべきか。

興福寺で行われた読経など様々な行事にも、茶が多用されている。まず、『大乘院寺社雜事記』が記す新供論という宗儀と茶のありようは以下の通りである。

新供論事兼日ヨリ以御房中奉行奉書、納所懷曉得業方へ来十八日可被始行之由仰之、(中略)五卷了テ茶出之、
 天目御承仕引之⁽²⁾、新供衆講問同音唯識論如例始行之、(中略)六卷ノ初茶引之、天目臺在之、茶三袋前日
 御承仕二給之、御承仕引之、茶湯ハ御中屋ノ湯可用之、手水桶ハ常住ノ桶渡之⁽³⁾、

新供論在之、(中略)五卷以後茶引之、佛供上番、燈明小童方より渡承仕⁽⁴⁾、

新供講問論在之、(中略)五卷以後茶曳之了、御承仕小衣⁽⁵⁾、

新供衆同音論在之、御承仕兩人、小衣也、茶引之了⁽⁶⁾、

新供同音論在之、(中略)五卷時分茶献之、御承仕最如例、佛供・燈明仰付之⁽⁷⁾、

このほか、極楽坊で行われた逆修のための十三部經転読に必要とされた品目のなかに「茶十斤(二貫文)⁽⁸⁾」が
 みえ、己心寺で修せられた月忌の「五七日佛事」では、諷誦の僧に白布一反と茶二十袋などが下行されている⁽⁹⁾。

『東寺百合文書』のなかに、永正年間を中心に、毎年のように作成された「光明講方用脚算用状⁽¹⁰⁾」という史

料が数多く残されている。その算用記載は概ね「七十文 茶一斤 七カ度用之」「百六十文 茶代春秋八ヶ度」

「百文 茶代 四ヶ度分」「百五十文 茶代 五ヶ度講分」というもので、季御読経における「引茶」の儀を

連想させるが、一方で例年の光明講で催される「茶湯」に用いられた茶に関する記載と考えられなくもない。

宗教行事と茶に関する事例の多くは寺院を中心にしたものだが、神社の神供にも茶が用いられている。以下
 に掲出するのは、京都北野社における「供御茶」に関する主な記載⁽¹¹⁾で、神供用の茶摘みも行われていたようだ⁽¹²⁾。

延徳二(四九〇)年四月二十日「御神供御茶八嶋成孝被取参候、御茶ツホ今度ウセ候、御下用枘八升御下行、」

同年四月十八日「御供の御ちや政所殿ヨリ御下行、但今度御ちやつほうせ候間めいわくのよし成孝申さる、、

（――部は見せ消し）」

同年四月二十日「御供御ちやをとり成孝まいられ候、さ候間成孝御政所殿へ申され候事ハ、今度つほう
せ候間めいわくにて候、」

明応二（一四九三年八月二十日）「御供御茶つめ候、」

同八年四月二日「神供御茶つめ候、これハ宮仕下女を出候て其沙汰いたす也、」

同九年四月五日「神供御茶今日つませられ候也、目代奉行罷出候、」

永正六年四月二十五日「御供御茶屋きんぬ（んぬ）此内よ茶よき茶一きん半、たらり一きん半ひくつ能久の方に
てしわけ、（――部は見せ消し）」

神社の供茶に関しては、このほかに『劔神社文書』年未詳（享祿元（一五二八）年カ）「織田劔大明神寺納米下
行分（劔大明神寺納米錢下行分）注文¹³」という史料に、以下のような記載を所見している。

寺社代下行分

伍貫九百文 「一」年始歳暮八朔所々御礼

（中略）

式百文 「十七」別時七ケ日夜之茶

参百文 「十八」同炭之代

（中略）

式百文 「四十一」修正会七ケ日夜茶之代

(中略)

右如此御供并御造宮神祭諸講説已下、為各嚴重可致取沙汰候、於衆中聊不可存疎略候、若不相届付而者急度可被仰付候、仍状如件、

(後欠)

以上が、宗教儀式・行事と茶に関する主だった事例だが、もう一つ見ておかねばならないのが、故人の忌日や命日などに行われる法事や法要などにおける供茶・献茶の事例である。以下、その主だったものを見ておこう。所見した史料なかで、法事や法要などにおける供茶・献茶の事例として早期に属するのが『師守記』歴応二(二三三九)年十月九日条の「今日浄空上人光臨有大茶、幸甚々々、今日故河内守師宗朝臣忌月也、仍浄空上人招引云々」という記載である。中原師守が伯父師宗の「月忌」にあたって浄空上人を招引し「大茶」を催したというもので、法事の茶俗に関する早期の史料と言えそうだ。同記には他にも「今夕先忌精霊五七忌辰也、(中略)、「導師」役参入の記載)、御対面、先差時茶等、其後於御閉眼四間有説法、卒都波面妙法蓮華經一部、(中略)并七鉢佛菩薩内地蔵像等供養之、(中略、御布施の記載)、及晚被送遣了」とあり、続けて「参墳墓」の記事がみえている。

故人の法事や法要などに、茶は早くから多用されている。その主だった事例を一覧したのが表2「法事・法要などにみる茶」である。

足利尊氏が死去したのは延文三(一三五八)年四月三十日のこと、¹⁶『建無涯浩禪師語録』「小佛事」の項には、「征夷大将軍奠茶」と題した法語が行われたことが記されている。この「奠茶」をはじめ、こうした法事や法要な

どにおける供茶・献茶の表現は様々で、勝定院(足利義持)の遠忌仏事にあたり、『建内記』の記主万里小路時房が精進のため「清茶」を供えていること⁽¹⁷⁾、「清仲大居士大祥忌」に茶湯儀礼として「茶札」が行われていること⁽¹⁸⁾などはその一例であるが、総じてみれば、「投茶二十袋」⁽¹⁹⁾・「曳茶持参」⁽²⁰⁾のように、茶そのものの持参や献供といったことが多かったようで、後にはこうした茶を「吊用茶」⁽²¹⁾などと称するようになっていく。地域によって多少の違いはあるものの、今日も香奠返しに茶が用いられることは多い。

〔註〕

- (1) 『法隆寺祈雨旧記』「観応三年壬辰雨乞事」(『大日本史料』第六編之十七)・「文和四年乙未雨乞事」(『大日本史料』第六編之二十一)・「康安二年壬寅七月十六日雨乞始」(『大日本史料』第六編之二十四)
- (2) 康正三(一四五七)年二月十八日条
- (3) 同年三月二十二日条
- (4) 寛正二(一四六一)年二月二十九日条
- (5) 同三年二月十日条
- (6) 同四年三月六日条
- (7) 文明十二(一四八〇)年二月二十八日条
- (8) 同七年二月十九日条
- (9) 明応七(一四九八)年五月二十四日条
- (10) 東京大学史料編纂所「古文书フルテキストデータベース」の検索による。
- (11) 『北野天満宮史料』「北野目代日記」
- (12) 同上「北野目代日記」明応九(一五〇〇)年四月五日条

- (13) 福井県公文書館「古文書」 目録データベースの検索による。なおこの史料については「本文書」二ハ紙継目一 一箇所あり。最初ノ一箇所ニ朝倉孝景ノ花押アリ。残りノ箇所ニハ全テ義景ノ黒印アリ。ナオ、最後ノ三行「右如此」以下カラ筆ガ異ナル。本文書ハ年月日未詳デアルガ、前号ト一連ノモノデアル。」との注が付されている。
- (14) 『師守記』貞和元(一三四五)年九月二十七日条
- (15) 『大日本史料』第六編之二十一
- (16) 法要等の仏事に祭祀された「奠茶」については、足利義持の祖母紀良子の入滅に際しても「洪恩院殿奠茶」が行われており(「常楽記」〔『大日本史料』第七編之十八〕) 応永二十(一四一三)年七月十三日条、『養浩集』(同上)『大日本史料』)、 応永二十一(一四一四)年四月四日に死去した美濃守護土岐頼益の「茶毘諸佛事」(南禅寺大授庵所藏)『法語断簡』〔『大日本史料』第七編之二十〕)では、「奠茶」とともに「奠湯」も行われている。また、貞治元(一三六二)年七月七日の大僧都法印杲宝死去に因しても、初七日に「靈供献之」「送茶三種」ということがあり(『口決裏書』、康安二年具注暦頭書、東寺観智院所藏、『大日本史料』第六編之二十四)、同年十一月三日の大友氏泰の「送喪」においても「淡茶一甌」が霊前供物として用いられており(『無規矩』(下之上)「祭魏獨峯」〔『大日本史料』第六編之二十四〕)、足利義満の例年五月に催される年忌では二汁三菜の食事とともに茶が振舞われている(『蔭涼軒日録』延徳三(一四九一)年五月二日・四日条。『隔窠記』寛永十九(一六四二)年五月六日・正保元(一六四四)年五月六日・慶安元(一六四八)年五月六日条ほか)。なお、表2の記事に何点が見出せるように、茶そのものが供えられるということもあったようだ。位牌の前で茶が点てられたり(『蔗軒日録』文明十七(一四八五)年四月五日条)、「煎茶之果」として餅が添えられるということもあった(『鹿苑日録』二「横川日件録」明応二(一四九三)年二月六日条、『大日本史料』第七編之十)。
- (17) 『建内記』嘉吉三(一四四三)年正月十八日条
- (18) 『蔗軒日録』文明十六(一四八四)年十一月一日条
- (19) 『蔗軒日録』文明十六(一四八四)年六月二十四日条

(20) 『大乘院寺社雜事記』 文明十三(一四八一)年四月二十二日

(21) 『手嶋家文書』 年未詳四月二十二日付「書狀斷簡(芳菜園主人宛)」に「弔用茶受領御札」とある(九州大学記録資料館九州文化史資料、九州大学総合研究博物館デジタルアーカイブの検索による)。

第二章 茶俗世界における「茶湯」の歴史

『邦訳日葡辞書』⁽¹⁾には「茶湯(チャトウ)」について、以下のような説明がされている。

Cha to チャタウ(茶湯) Cha yu(茶湯ある場所、すなわち、死者の名前を記した小さな板(位牌)の前に供えて、その人に捧げる茶(Cha)と湯。Chatou o aguru(茶湯を上げる)上のようにしてその茶(Cha)を供える。

故人の霊前に供えられる茶が「茶湯」(チャトウ)と称され、そうした供茶の行為が、十六・七世紀ともなれば一般に理解される状況になっていたことを物語る一つの証左といえよう。時代は下るが、慶応二(一八六六)年の初演という歌舞伎『浪白間橋込打船』の台詞にまで「今仏壇へ茶湯をして寿命長久守らせたまへと、佛へ向つて願ひなされるは、死んだ人でもない様子、どういふ譯でござりまする。」⁽²⁾というような登場の仕方をするのも、そうした社会的理解の一例とみるべきであろう。

京都の東寺の縁日として知られる毎月二十一日の「弘法さん」は僧空海の忌日に当たるが、この日に「茶湯」が行われる地域もあったようで、それは「弘法大師御茶湯日」⁽³⁾と称されている。『大徳寺文書』には、一休宗純の忌日を「真珠庵宿忌」とし「半齋法語」の仏事が修されたことを示す記録が多く残されているが、ここで

も「一休示寂」を慰めるために、香華・燈燭とともに「茶湯」を備えるということがしばしば行われている。⁽⁴⁾

忠臣蔵で有名な赤穂義士の史蹟に関して、浅野家の発願で行われた正福寺本尊の工事でも「茶湯」が催されており、その折の水に「霊水」が用いられた⁽⁵⁾というのも興味深い。神奈川県立公文書館によって管理されている「県史写真製本目録」⁽⁶⁾の「横浜市戸塚区金子六郎氏所蔵資料1」に、慶応四(一八六八)年七月付「大山茶料控」という史料の所在が確認できるが、ここでいう「大山」というのは、茶湯寺参詣で知られる大山茶湯寺(来迎院)のことであろう。今も神奈川県伊勢原市や平塚市・厚木市を中心として、「茶湯寺参り」という風習がしっかりと残されていることは注目されてよい。⁽⁷⁾大阪府和泉市父鬼では、忌明けなど適当な時期に故人の髪の毛や爪などを高野山に納める「納骨」の習慣があり、その宵の晩には親類などで「オチャト」をあげてもらったり、女人堂でオチャトをして納骨するということもあった。

前章で触れることがあったが、「茶湯」(チャトウ)は、当初から宗教的な世界に属している。それでは、この「茶湯」という言葉なり供茶・献茶としての行為は、何時頃からその姿を見せはじめなのか、またそれを掌る者(機関)や設定の場所、さらに「茶湯」に用いられる道具(具足)などがあったのか。以下、主要な史料を挙げながら、そうした「茶湯」の歴史を探ってみたい。

『野口家文書』建治三(一二七七)年三月吉日付「式川氏系図目録」⁽⁸⁾には、「七之結戒在、就其、悪火喰合ニテモ、国前寺ト亦者生死之薬師ニテ湯茶ヲ吞、則社参仕」という一文が見えている。おそらく「悪火喰合」に遭遇した場合、茶の「湯」を飲み社参するとその災いから逃れられるという信仰があったことを示しているが、この事例が、茶俗世界でいう「茶湯」に近い。

所見した史料により、「茶湯(チャトウ)」に関する主な事例を一覧したのが、表3「史料にみる茶湯(チャトウ)」である。この範囲内では、「茶湯」の最も早期の事例は、前章で掲げた『金沢文庫古文書』年未詳十一月十日付「禪爾書状」で、『大徳寺文書』応安元(一三六八)年十月十八日付「徳禪寺法度案」⁽⁹⁾にみえる「毎月初一日・十一日・二十一日、洗米茶湯、金剛經一卷・大悲呪一反・消災呪三專之、御自筆経呪者、僧形之尋常茶飯也、誰人敢懈怠乎」という一文中の「茶湯」も同類に属している。

十五世紀以降、この「茶湯」に関する記事は、様々な宗教儀式・行事を中心に多出しはじめる。先記した大師講に関連してみれば、越前国丹生北郡糸生郷にあった越知山大谷寺先達方の「神祭・法事・山上同於中宮御供之規式并頭役、或座配、或房次第可勤仕条目」を定めた文明十年(一四七八)年十二月二十五日付「越知山年中行事」⁽¹⁰⁾にみえる「十月十四日泰澄大師講法事」の「茶湯」も同様の事例である。この大谷寺の場合、「茶湯」を執行するのは「衆層一之役」と規定されている。

文明十九(一四八七)年五月、興福寺四恩院で学侶・六方衆により七日間にわたる千部論の読経会が執行されているが、やはり「茶湯」が催されたのか、『大乘院寺社雑事記』によれば、その茶の世話は「寺門十六納所共」⁽¹¹⁾の所役とされている。四恩院の十三重塔は白河院建立と伝えられているが、文明十一年十一月二十二日に馬借一揆のために十三重塔および院内が悉く焼亡、同十三年に鐘が鑄造、同十七年四月十一日には十三重塔が立柱されたという。⁽¹³⁾堂舎の再建は三重塔の立柱より先に行われたものか、『多聞院日記』文明十六年五月二十二日条には、この日から四恩院で始まった千部論の状況と、この時に催された「茶湯」の詳細が記載されている。「茶湯番」や使われた道具類など、興味深い記事なので以下に掲出しておこう。

自今日於四恩院千部論始行、(中略)又茶湯之事就納所為理運之間、三日ニ沙汰之、今度茶湯番初日春信房律師、第二日円忍房、第三日宗芸、第四日陽専房擬講、第五日深賢房、第六日源舜房律師、結日禪栄房法印、于時供目代学順房、

七日間におよぶ大掛かりな法会で「茶湯」⁽¹⁴⁾が重要な儀礼として位置付けられており、「茶湯番」⁽¹⁵⁾がこれを執行したが、用いられる茶は一斤余で、「炭片荷、鑊子二、茶碗五十、荷桶二荷、下部二人、下茶碗三、茶セン三、茶ヒ杓三、茶巾三、ノコ巾布三、下水・飯餉各三、盆三」の「茶具足」は、前日より四恩院に預けられ、後夜より「茶湯」の準備が行われている。なお、「茶湯番」に関連して、『多聞院日記』には、永正四(一五〇七)年九月十二日に興福寺南円堂で執行された「学侶分同音論」の読経会にもなう「茶湯」については、「先規」が無いゆえ「唐院奉行所沙汰」⁽¹⁶⁾とすることが記されている。多聞院では三月一日の「高山八講」でも「茶湯」が催されており、「新薬師寺堂衆方」が料理とともに「茶湯」の所役を担うものとされていた。⁽¹⁷⁾

抹茶による接待と「茶湯」が併行して行われたと思われるのが、『大乘院寺社雜事記』⁽¹⁸⁾が記す次の史料である。

一 新供衆講問同音唯識論如例始行之、(中略)六卷ノ初茶引之、天目臺在之、茶三袋前日御承仕ニ給之、御承仕引之、茶湯ハ御中屋ノ湯可用之、手水桶ハ常住ノ桶渡之、

「茶引之」については、同記の康正三(四五七)年二月十八日条に「五卷了テ茶出之、天目御承仕引之」、寛正三(一四六二)年二月十日条に「五巻以後茶曳之了」とあることから抹茶が提供されたものと考えられるが、「茶湯」の茶が抹茶あるいは煎じ茶の類であったのかは判然としない。また、文明十二(一四八〇)年二月二十八日条には「五巻時分茶献之、御承仕最如例、佛供・燈明仰付之」とあることからすれば、献茶から仏供に至る一

連の儀礼を「茶湯」と称していたのかもしれない。

雨乞いの祈祷にも「茶湯」が行われている。たとえば『大乘院寺社雜事記』文明十七年七月二十三日条には「良家衆於社頭大般若転読之、為祈雨也、於樸本館也、各付衣・五帖・本承司一臆勤之、一献ハ一臆東門院申付之、茶湯ハ東林院可沙汰之由申云々」とあり、『東大寺叢書』（大日本仏教全書）天文四（一五三五）年五月十二日条にも「大佛殿広目天宝前二テ。法花同音雨乞アリ。（中略）茶湯者西廻廊二幕ヲ引テ。納所ヨリ沙汰。」とみえている。祈雨祈願の宗儀に参集した衆僧らに対する茶の接待あるいは供茶の儀とみるべきだろうか。

「茶湯」は、個人の信仰や家としての祭祀、あるいは故人の忌日や回忌などのなかにも登場する。たとえば、『大乘院寺社雜事記』長祿四（一四六〇）年二月十二日条にみえる「東大寺二月堂二令参籠、（中略）晝以下茶湯等澄春用意之」、文明二（一四七〇）年二月八日条の「二月堂参籠、（中略）茶湯等事樋坊二仰付之了、加供百疋送堂司方、輿方十疋兩人中給之、愛満・十郎・松菊召具、今日別火、前二日心精進也」は、大乘院尋尊が東大寺二月堂参籠にあたって行う「茶湯」など仏供の準備を命じたものと解することができる。少し後代の例になるが、『舜旧記』元和元（一六一五）年八月十五日条にも「板伊州女中当社へ為参詣也、俄予柿・茶湯已下御社へ持上成」という記事がみえている。板倉伊賀守の女中が予告なく吉田社に参詣、梵舜は急いで柿・「茶湯」の供物を社殿に持ち上がっている。「茶湯」が柿とともに供物として用いられていることも興味深い。いわゆる「茶湯」が柿や梅干しなどと共に供えられるというのは、後述する正月の「大福茶」や五蘭盆会の「オチャトウ（御茶湯）」にしばしば見られる光景であり、それは現代の茶俗のなかにも継承されている。

故人の忌日や回忌でも、接待や供儀をとまう供養として茶は十四世紀以降の史料にその姿を見せはじめ、

十五世紀になれば「茶湯」という言葉が登場する。

年忌の法要に「茶湯」という言葉が登場する早期の史料が、『北野天満宮史料』文安四(一四四七)年四月吉日条にみえる次の一文である。

敬白

(中略) 亥外九十一年正月一日ヨリ始テ興大願(中略) 七月八日ハ依為年忌千僧供養、雖茶接待、十箇年中、其数一万看読法華、都合其数一千五百訓読、悉皆八百余部講読畢、(中略) 為茶接待、仏通供養、偏為茶湯神官の吉田家でも「月齋朝齋、茶湯」⁽¹⁹⁾とあるように、月々の命日に際して「茶湯」が行われているが、一方で特定故人の祥月命日にも同様の祭祀が催されている。たとえば『舜旧記』慶長十七(一六一二)年二月二十六日条の「無量院殿御年忌、別儀一袋、御茶湯奉備」は、無量院殿の年忌法要にともない、祭壇などに「御茶湯(オチャトウ)」が供えられたことを示すもので、茶には抹茶が用いられている。「別儀」とは宇治茶の等級名で、「一袋」とあることから、この場合の「御茶湯」は一碗の抹茶を点てたものではなく、袋に入ったままの碾茶そのものが供えられたのかもしれない。時代は下るが、慶応四(一八六五)年七月二十日に催された慎徳院(徳川家慶)十三回忌法事に際しては、宇治茶師上林がその「御茶湯」に用いる茶を献上⁽²⁰⁾している。

このほか、『舜旧記』には寛永七(一六三〇)年・同八年の十一月六日条にも、忌日法要にあたって、桃斎西堂に設けられた祭壇に「茶湯」と仏供が備えられ焼香が行われたことが記されている。『福井県史』が紹介する寛政四年(一七九二)正月記「智鏡尼上座遺訓」全二十八条のなかに、「一、御先祖の御命日には速夜より家内中が精進し、香華を捧げ、有合せの品を清浄にして、茶湯靈供等を献上せよ。」⁽²²⁾という一条があるのも貴重である。

文化四（一八〇七年）作成の『若松風俗帳』⁽²³⁾にも、死者に対する「靈前茶湯」の儀が記載されているが、「靈前茶湯回向」のために畑や金子を寄進するということもあった。

一休宗純の忌日茶湯については先に紹介したが、『大徳寺文書』には永正七（一五二〇）年三月とされる「宗純（一休三十三回忌食膳注文）」⁽²⁵⁾があり、そのなかにも「茶湯」の記事がみえている。また、国文学研究資料館の『日本古典籍総合目録』によれば、館所蔵及び寄託の和古書のなかに、金沢市加越能を資料の所在地とする「心樹院法事茶湯一卷」があり、それには「宣光院様」の安永二（一七七三）年三回忌・同六年七回忌・天明七（一七八七）年拾七回忌・寛政七（一七九五）年二十五回忌・享和三（一八〇三）年三拾三回の「御茶湯留」が収められており、安永三（一七七四）年「善良院拾七回忌茶湯執行一卷」という史料の存在も確認できる。また、『宇土細川家文書』正徳四（一七一四年）二月十九日付「差出人未詳書状」⁽²⁶⁾は、「源立院十七回忌に付茶湯執行」に関するものであるという。『温敬公記史料』⁽²⁷⁾は、文政六（一八二三）年五月九日に金沢藩前田綱紀の「百回忌茶湯」が江戸広徳寺で修せられたと記している。

「茶湯」は、葬送儀礼とも深く関っている。富山県公文書館所蔵史料の一つに「真宗寺院として越中最古の由緒にふさわしい内容をもつ」とされる『瑞泉寺文書』があり、そのなかに前藩主光高の正室逝去にともない、「茶湯」の執行を瑞泉寺に仰せ付けたという内容をもつ明暦二（一六五六）十月十八日付「茨木右衛門ら書状」の存在が確認できる。また、福井県では、幕末の史料によれば、葬列の一行に「茶湯」と呼ばれる役割の者が随行する⁽²⁸⁾ことがあったという。

補足的に、「茶湯」に用いられる道具類についても触れておきたい。すでに文明十六（一八四四）年五月に四恩

院の千部論始行にともなうて催される「茶湯」で、鐘子・茶碗・荷桶・下茶碗・茶筥・柄杓・茶巾・ノコ斗布などの「茶具足」が準備された事例を挙げたが、萬宗和尚大禪師の二百五十年忌の執行を記した『隔莫記』万治元年(一六五八)閏十二月五日条には、同師の木造を安置した仏壇に「茶碗之盛物」六個と「茶湯三具足」・茶子が供えられたことを伝えている。「三具足」が何を指しているのかは記されていない。

『大乘院寺社雜事記』明応九(一五〇〇)年三月一日条には、「竹内光秀百个日佛事」にともなうて、「雑物・茶碗(ウカイ)并臺」などが遣進されたことが記されており、近世の文化文政年間の記録になるが、『郡上郡赤谷村慈恩寺鐘山月鑑』⁽²⁹⁾の盃蘭盆に関する記事には、盆棚に供えられたものの一つに「茶湯茶碗」が見えている。また、慶長十五・六年から寛政末年までの約二百年間に、南禪寺に寄進された什宝物の記録で、それらの伝来由緒を記したものとしては最古のものとされる『南禪寺常住什宝等寄進記録』⁽³⁰⁾には、本光国師(以心崇伝)の位牌の前に置かれる三具足に続いて「茶湯器・香記」が列挙されており、『西福寺文書』年未詳「散卷勤行次第」には「本尊之御前立位牌、壇上打敷一枚、三具足、縁高茶湯器斗之事」⁽³¹⁾とみえている。「茶湯器」というのは「茶碗」そのものを指しているのだろう。⁽³²⁾現在、盃蘭盆のオチャトウ(御茶湯)に使われる茶碗は、やや縦長の茶飲み茶碗が多く、ここでいう「縁高」というのは、そうした形状のものであるだろうか。

茶碗以外にも、茶湯に用いられた道具類が散見される。たとえば、『北野天満宮史料』天正十二(一五八四)年「目代昭世引付紙背文書」中の「勘定断簡」には「茶たうたい 一ツ」の記載がみえている。「茶湯台」と解すべきであろうが、どのような形状のものかは分らない。また『東大寺文書』寛永十八(一六四二)年四月十九日付「周防国衛並牟礼両村年貢勘文」⁽³³⁾には、「八匁五分 けう水桶沓つ・茶湯たご 沓荷・柄杓二本ノ代銀」

とある。今も各地で行われている盃蘭盆のオチャトウでは、仏壇や盆棚に供えられ頻繁に取り替えられる番茶や煎茶の類は捨てずに桶やバケツにとっておき、深夜に辻や雨垂れ・庭などに撒くところが多いが、その保管の容器を「茶湯田子」などと称しているところがある。掲出した「茶湯たご」もそうしたもののだろうか。なお、『甲州文庫』には嘉永四（一八五二年）の「天目山開帳に付茶湯釜借用証文⁽³⁴⁾」という古文書があるが、ここにも見える「茶湯釜」は、茶云や茶の湯で用いるものとは異なり、寺院の開帳にもなう「茶湯」専用の茶釜と解することもできよう。

以上が、仏・神事や忌日の法要などで執行される「茶湯」及びそれに用いられる道具類の概要である。

「茶湯」は、こうした宗教的儀礼とは別に、正月・盆月の歳事あるいは産育・婚礼・葬礼といった通過儀礼にも登場する。いわゆるライフサイクルにおける「茶湯」は、現代に到るまでオチャトウ・チャトウなどと称される習俗として各地に伝承されており、具体例については既にいくつかの論稿で明らかにしているが、正月の大福茶や盃蘭盆の茶湯などに関する史料は、十四世紀半ばにまで遡って求めることができる。これらについては、第四章で論じたい。

〔註〕

- (1) 慶長八（一六〇三年）本編刊 岩波書店一九八〇年
- (2) 『日本戯曲全集』三十巻 歌舞伎篇 春陽堂一九二八年
- (3) 福岡町史編纂収集資料『織田文書』。九州大学総合研究博物館デジタルアーカイブより。
- (4) 東京大学史料編纂所「古文書フルテキストデータベース」の検索による。

- (5) 明治期生活史及び洋学関係資料「義士史蹟 浅野家發願工事正福寺本尊茶湯用靈水」(「れきはくホームページ」)より。
- (6) 神奈川県立公文書館「県史写真製本目録」「相模原市龍像寺所蔵資料1」
- (7) 神奈川県には、伊勢原市や平塚市・厚木市を中心として、今も「茶湯寺参り」という習俗が残されている。この「茶湯寺参り」について、平塚市の広報誌「私のふるさと再発見」②(平成十八年五月十五日発行)には、「相模川の下流域、大山の秀麗な山容を望み見られる地域を主体に、人が亡くなって一〇一日目に当る日に大山の茶湯寺にお参りするという習俗があります。百ヶ日にお参りするところもありますが、茶湯寺とは茶湯供養をする寺の通称で現在は大山の稲荷町にある涅槃寺、正式には誓正山茶湯殿涅槃寺という浄土宗の寺がそれにあたり、釈迦涅槃像(通称寝釈迦様)の前で参詣者の宗派を問わず茶湯供養が行われています。(中略)茶湯供養が行われるようになったのは明治以降のこととしてそれ以前の江戸時代には女坂の途中にあった「来迎院」で茶湯供養が行われ、参詣のしかたも現在とは異なっていました。江戸時代には追分(男坂女坂の別れるところ)に前不動堂があり、ここから上は山上といつて浄なる地域とされていました。来迎院も此の地域内にありましたが、明治の初めの「神仏分離」によりこの山上には神道のあらしが吹き荒れ仏教的色彩は一掃され、死にまつわる行事などは一切出来なくなりました。そこでやむなく追分から下の俗なる地域で茶湯供養が行われる様になり現在の茶湯寺参りの姿に変わったと考えられます。来迎院は「女坂の右にあり、別当八大坊及び山上寺院の菩提寺で、土地の者は此の寺を茶湯寺と言っている。これは近辺の農家の人が死ぬと百ヶ日に当る日に不動堂に参詣して死者の法名を書き出し、そのあと来迎院に来て茶湯を受けたので茶湯寺と言われているのである。又脇坊の光円坊でも同じことが行われている。」といった事が、『新編相模国風土記稿』に書かれています。そのころは不動堂が山上の中心的存在でありました。不動堂から山頂の石尊社へ通じる参道には木戸が設けられていて夏山といわれる例祭の期間二〇日間を除き木戸は閉ざされていましたので普段の日の大山詣では不動堂までしか登りませんでした。(中略)もろもろの大山信仰の中で、「参詣する途中で亡くなった人とよく似た人に必ず会える」との言い伝えのある茶湯寺参りは、大山は亡くなった人の魂が行きつくところ、即ち大山を霊山とあがめる信仰の現在に残る姿であると考えられ、百ヶ日にお参りするということはその日が死者の魂が大山に入り、

ご先祖様の仲間入りをする日ととらえられていたのではないのでしょうか。茶湯寺には行かないで菩提寺にお参りしてすませている。茶湯寺参りは知っているがその日は近所の人にお茶を振舞うことすませている。などの声を聞きます。又大山ではなく片瀬の竜口寺へいくというお寺さんもあります。(中略)今の平塚市の大部分が農村であったころにくらべて大分薄れては来ていますが今も茶湯寺参りは行われています。(中島考二「大山の茶湯寺参り」と解説されている。なお、『新編相模国風土記稿』は天保十二(一八四二)年の成立。

(8) 『鎌倉遺文』 一一六九六号

(9) 東京大学史料編纂所「古文書フルテキストデータベース」の検索による。

(10) 『越知神社文書』、福井県公文書館「古文書」目録データベースの検索による。

(11) 文明十九年五月十五日条

(12) 以下、四恩院およびその十三重塔については「大和興福寺」のウェブ検索データによる。

(13) 現在は廃寺。『春日神社境内図』の四恩院部分図に明和四年(一七六七)四月焼失と朱書があるという。跡地は春日野野田東端。

(14) 四恩院の法会にもなう茶については、『大乘院寺社雑事記』文明十九年五月十五日条に「一 千部論学侶・六方於四恩院説之、七今日、茶寺門十六納所共所役、兼日相催云々」とみえており、寺門十六納所共の所役とされた「茶」も「茶湯」の執行と理解していいだろう。また後代の例になるが、『春日大社文書』承応二(一六五三)年十一月日付「本談義納所方下行注文案」に「一五斗 千部論茶湯方」とみえている。

(15) 『禪定寺文書』(古代学協会編)永正五(一五〇八)年六月二十四日付「禪定寺諸法事并諸下行目録」に「(六月二十四日ヨリ)茶番可始、出俗守臈次可被勲仕候、」とみえているが、実態はよくわからない。

(16) 永正四(一五〇七)年九月十二日条

(17) 『多聞院日記』文明十六年三月一日条。なお、「茶湯」の所役を担うものとして、同記永正四(一五〇七)年九月十二日条にも「今日於南円堂学侶同音論在之、先規無之歟、茶湯者唐院奉行所沙汰之」とあり、ほかに『大乘院寺社雑

- 事記』文明十七年七月二十三日条に「一献ハ一騰東門院申付之、茶湯ハ東林院可沙汰之由申云々、『東大寺叢書』(大日本仏教全書)天文四(一五三五)年五月十二日条に「茶湯者西廻廊二幕ヲ引テ。納所ヨリ沙汰。」などとみえており、興福寺叢書(大日本仏教全書)享徳二(一四五三)年の項では「一。茶湯事。用意茶事。兼日不曳之。茶湯奉仕之者。石見也。」としている。また、長谷寺の本尊供養に奉仕した人々に対する下行銭の内訳を記載した『大乘院寺社雜事記』永正四(一五〇七)年四月九日条の一文には、「茶タテ」に二百文が下行されたことがみえているが、この「茶タテ」というのは茶湯の接待役のことであろうか。
- (18) 康正三(一四五七)年三月二十二日条
- (19) 『兼見卿記』天正十一(一五八三)年正月五日条
- (20) 内閣文庫所蔵史料データベースの検索による。
- (21) 『舜旧記』寛永七(一六三〇)年十一月六日条「忌日、桃齋西堂、於当庵茶湯・仏供備之了」、同八年十一月六日条「忌日、桃齋西堂、備茶湯・令焼香了」
- (22) 『福井県史』通史編四近世二、第二章第二節「四、地主の家訓(女性の書いた家訓)」参照。
- (23) 庄司吉之助編『會津風土記・風俗帳』卷三「文化風俗帳」
- (24) 群馬県立文書館目録データベースの検索による。寛政九(一七九七)年十一月「靈飯証文之事」(靈飯茶湯回向のため上畑二畝・金一両寄進)。
- (25) 東京大学史料編纂所「古文書」フルテキストデータベースの検索による。
- (26) 九州大学記録資料館九州文化史資料部門(九州文化史研究所)『宇土細川家文書』
- (27) 加賀藩史料。東京大学史料編纂所「近世編年データベース」の検索による。
- (28) 『福井県史』通史編四近世二、第五章第四節「三、通過儀礼(葬式)」に「大飯郡高浜村の庄屋の家での葬儀の事例により、その式次第をみていくことにする(常田幸平家文書)。亡くなったのは八〇歳の女性で、嘉永五(一八五二)年閏二月二十日に亡くなると同時に親類に知らせている。(中略)葬儀当日の二十二日の役割は、明松・靈供・導師幡・

幡・盛物・四花・香爐・茶湯・位牌・笠杖・四燈・天蓋・棺・添肩・供・野札などで、それぞれ必要な人数が割り当てられた。浄土真宗妙光寺を頼み野経をあげてもらい、火葬のち八人が七ツ時(午後四時頃)に灰寄参りを行った。二十三日は「仕上」と称して、寺はもちろん葬儀を手伝った人たち六〇人を招いて食事を振る舞った。」とある。

(29) 『岐阜県史』 史料編近世八

(30) 『南禅寺文書』 中巻

(31) 福井県公文書館「古文書」 目録データベースの検索による。

(32) 「茶湯器」については、『大徳寺文書』一三八九号(大日本古文書享祿元(一五二八)年十一月二十九日付「長蘆寺新添分校割帳案」(影写本)に「茶湯器本尊開山(言外宗忠)徹翁(義亨)三対」、同文書三三四三号の享祿四年七月二十九日付「宗順和溪渡物目録」(影写本)に「茶湯器 壺対」などもみえている。

(33) 東京大学史料編纂所「古文書」フルテキストデータベースの検索による。

(34) 山梨県立博物館収蔵資料データベースの検索による。

[以下、第三章「茶園の寄進と茶湯料」・第四章「通過儀礼と歳事の茶俗史」・「むすびにかえて」は、本稿「日本茶俗史の研究」(下)に続く。]

表1 宗教儀式・行事などにみる茶

年月日	茶に関する記載内容	典拠史料
承元三 (三〇五)年五月二十六日	季御読経、引茶	『猪隈閑白記』
観応三 (三五三)年七月二三日	於龍池、学衆一円 <small>大般若経</small> 、茶在之、開結	『法隆寺祈雨旧記』
観応三 (三五三)年八月一日	雨乞事、於龍田宮、龍王経三百卷読立、春行房茶ヲ被進	『法隆寺祈雨旧記』
康安元 (三二〇)年八月四日	盡七祭儀、靈几供茶	『東海一需餘滴』
康安二 (三二二)年八月一日	礼堂千卷読経、東郷若物西郷衆二茶ヲケタム	『法隆寺祈雨旧記』
康安二 (三二二)年八月二日	礼堂千卷読経、西郷若物東郷衆二茶ヲケタム	『法隆寺祈雨旧記』
享徳二 (四三三)年	御講師料理方、色々雑具、七百元、講師坊御茶四斤代	『興福寺叢書』
康正三 (四三七)年二月一八日	新供論事兼日ヨリ、五卷了テ茶出之、天目御承仕引之	『大乘院寺社雑事記』
康正二 (四三〇)年二月二九日	新供論在之、五卷以後茶引之	『大乘院寺社雑事記』
寛正三 (四三三)年二月一〇日	新供講問論在之、五卷以後茶曳之了	『大乘院寺社雑事記』
寛正四 (四三六)年三月六日	新供衆同音論在之、茶引之了	『大乘院寺社雑事記』
寛正四 (四三六)年五月八日	東林院仏事、奉仕の者に茶三〇袋、引出物	『山科家礼記』
文明七 (四七五)年二月一九日	極楽坊十三部経、茶十斤 二貫文	『大乘院寺社雑事記』
文明二 (四八〇)年二月二八日	新供同音論在之、五卷時分茶献之、佛供・燈明仰付之	『大乘院寺社雑事記』
文明一三 (四八二)年四月二二日	羅漢供等在之、真如院八万四千基塔摺写之云々、辰巳坊曳茶持参之	『大乘院寺社雑事記』
文明一八 (四八六)年九月一日	例而衆僧上方丈賀朔、茶礼如常	『大乘院寺社雑事記』
文明一九 (四八七)年五月九日	夜入社参、東門院参籠所茶進之、百个日参籠中也	『大乘院寺社雑事記』
文明一九 (四八七)年五月五日	千部論、七今日、茶寺門十六納所共所役	『大乘院寺社雑事記』
延徳二 (四九〇)年四月二〇日	御神供御茶八嶋成孝被取参候	『北野天満宮史料』
明応二 (四九三)年四月二〇日	北野社、供御茶	『北野天満宮史料』
明応七 (四九八)年五月二四日	五七日佛事於己心寺行之、下行、茶二十袋	『大乘院寺社雑事記』
大永七 (二五七)年三月二一日	遮那院仏道具目録、茶壺、茶桶	『瀧谷寺文書』

文龜二 （五〇三）年二月一七日	光明講方用脚算用狀、七十文、茶一斤、七ヶ度用之	『東寺百合文書』
永正二 （五〇五）年二月一七日	光明講方用脚算用狀、百六十文、茶代春秋八ヶ度	『東寺百合文書』
永正三 （五〇六）年二月一六日	光明講方用脚算用狀、百六十文、茶代春秋八ヶ度	『東寺百合文書』
永正四 （五〇七）年四月九日	長谷寺本尊供養、奉仕者下行錢内訳、「茶タテ」二百文	『大乘院寺社雜事記』
永正五 （五〇八）年二月一九日	光明講方用脚算用狀、百文、茶代、四ヶ度分	『東寺百合文書』
永正六 （五〇九）年二月二〇日	光明講方用脚算用狀、七十文、茶代、四ヶ度分	『東寺百合文書』
永正七 （五一〇）年二月二一日	光明講方用脚算用狀、百五十文、茶代、五ヶ度講分	『東寺百合文書』
年未詳（享祿元（五二六）年）	織田劔大明神寺納米下行分注文、修正会七ヶ日夜茶之代	『劔神社文書』
明曆三 （六五五）年五月五日	朝、神主時（齋）の物を供え、香焼、献茶	『池田光政日記』
貞享五 （一六八八）年四月二日	大佛殿新始千僧供養、於勸進所有施齋、齋一汁一菜、菓子茶等	『東大寺叢書』

表2 法事・法要などにみる茶

年月日	茶に関する記載内容	典拠史料
<p>曆応二 (二三五)年一〇月九日 貞和元 (三四五)年九月二十七日 延文三 (三五六)年四月三〇日 貞治元 (三六〇)年七月七日 貞治元 (三六〇)年十一月三日 応永二〇 (四三三)年七月一三日</p>	<p>師宗朝臣忌月、淨空上人光臨有大茶 今夕先忌精靈五七忌辰、先差時茶等、其後於御閉眼四間有說法 足利尊氏崩御、「征夷大將軍奠茶」(法語) 大僧都泉宝寂、初七日、追善儀、藥上院僧使來、送茶二種 式部丞大友氏泰卒、送喪、淡茶一甌、志之所之 義持祖母紀良子入滅、十九日、於等持院御茶毘、「洪恩院殿奠茶」 (法語) 美濃守護土岐頼益卒、茶毘諸佛事、奠茶・奠湯 前建長寺住持寂、永安寺殿(足利氏滿)奠茶佛事日 伏見宮榮仁親王續去、十二月十九日、今御所茶十袋二盆被進之 勝定院殿御遠忌、禪家御佛事、予精進供清茶廻念佛 七月八日ハ依為年忌千僧供養、為茶接待、仏通供養、偏為茶湯 「円光院下行物料足注文」、百文 九月御忌日(後醍醐天皇国忌)茶 同炭代</p>	<p>『師守記』 『師守記』 『無涯浩禪師語録』 『口決裏書』 『無規矩』 『養治集』 『法語断簡』 『延宝伝燈録』 『看聞日記』 『建内記』 『北野天満宮史料』 『醍醐寺文書』</p>
<p>応永二 (四四〇)年正月六日 文明七 (四五七)年二月一九日 文明一三 (四八二)年四月二二日 文明一六 (四八四)年四月二二日 文明一六 (四八四)年四月二三日 文明一六 (四八四)年六月二三日 文明一六 (四八四)年六月二四日</p>	<p>「円光院下行物料足注文」、百文 九月御忌日(後醍醐天皇国忌)茶 御茶並炭代 極楽坊十三部経逆修日記、茶十斤 二貫文 今日三七日也、佛事如形修之、羅漢供等在之、辰巳坊曳茶持參之 先師(竹庵大縁)真首座献茶点灯焚誦 先師示寂辰、予拙掛力像、一茶一香 先師真前燭茶香、誦咒三拜 南英牌前設供、茶香灯燭、大雄寺永春首座投茶二十袋</p>	<p>『醍醐寺文書』 『大乘院寺社雜事記』 『大乘院寺社雜事記』 『蔗軒日記』 『蔗軒日記』 『蔗軒日記』 『蔗軒日記』 『蔗軒日記』</p>

文明一六(四四)年一月一日	文明一六(四四)年一月二二日	文明一七(四五)年四月五日	文明一七(四五)年九月七日	文明一八(四六)年正月七日	文明一八(四六)年二月七日	文明一八(四六)年四月二二日	延徳三(四五)年五月二日	明応二(四五)年二月六日	明応二(四五)年九月二一日	明応二(四五)年九月二一日	明応七(四九)年五月二四日	明応九(五〇)年三月一日	文龜三(五三)年一〇月二九日	天文一六(五七)年二月九日	永祿二(五五)年一月二二日	永祿二(五五)年一月二〇日	永祿二(五五)年一月二二日	天正一一(五三)年二月三日	慶長二(五七)年三月二一日	慶長六(六〇)年四月二八日	慶長七(六〇)年七月五日
清仲大居士大祥忌辰也、茶礼如常	先師宿忌、点茶灯	明日六日、乃先父(量阿)十三年忌、設置阿牌、牌前点茶備灯	三七日忌、設供獻香茶	莊△祖師真前備供茶燭香灯	(祥庵忌日)祥庵設供、法花、灯茶	先師宿忌、備茶灯	当院天山相公(足利義滿)御年忌、半斎齋会、二汁三菜、一果、茶了	随例有鹿苑院殿月忌齋、儀法以前有煎茶之果、今者善哉餅也、座敷者御影間也	「宗純(一休)十三回忌下行帳」、老貫文 梅尾 茶二斤、老貫文 中茶	「宗純(一休)十三回忌出来物注文」、茶三十袋 宗玉、茶一器 紹嚴	五七日佛事於己心寺行之、悉皆七貫文下行、諷誦物等事、茶二十袋	竹内光秀百个日佛事在之、雜物・茶碗并臺一、進之	「龍翔寺開山式百年忌納下帳」、老貫百文 茶八斤 雲脚共	「正印禪師二百年忌納下帳」、參拾式文 茶 雲脚	養命坊中将為香典十疋、無上二茶半袋持来也	たいやに尼三人供養する也、茶一知慶持參也	六七日也、為香典十疋、茶五袋持来候也、為布施十疋信徳へ茶二袋持參申也	於兵庫庄被官衆茶申付、代五斗遣之、父母五十年忌用沙汰令祝着了	叔父東坊七回忌、北向ヨリ二百文被遣了、茶一頭切持来云々	「月窓佳公土御門有通忌入目小日記」、五合 茶	「菊仙院華岳慈春(半井瑞策室)仏事儲日記」、廿文 茶
『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔗軒日録』	『蔭涼軒日録』	『鹿苑日録』	『大徳寺文書』	『大徳寺文書』	『大乘院寺社雜事記』	『大徳寺文書』	『大徳寺文書』	『大徳寺文書』	『北野天満宮史料』	『北野天満宮史料』	『北野天満宮史料』	『多聞院日記』	『言経卿記』	『大徳寺文書』	『大徳寺文書』

<p>慶長八 (一六〇三)年三月一日 慶長一七(一六三〇)年二月二十六日 寛永一九(一六四二)年五月六日 正保元 (一六四四)年五月六日 慶安元 (一六四六)年五月六日 慶安四 (一六五〇)年六月七日 年月日未詳 年月日未詳 年月日未詳</p>	<p>明日花岳院殿(山科言継)法事ニ松林院西堂(玉芳)・同宿等来了茶 モチテ来了 無量一院殿御年忌、別儀一袋、御茶湯奉備 天山相公(足利義滿)年忌、中酒一反、菓子喫茶以後、各帰院 天山相公(足利義滿)年忌、喫茶了各帰院也 天山相公(足利義滿)年忌、喫茶了各帰院也 若狭国小浜藩主酒井忠勝、茶を前將軍徳川家光の霊前に献ぜしむ 『書状断簡(芳菜園主人宛)』、弔用茶受領御礼 三月二十一日、東寺沙門が「敬以香茶之奠」、累代阿闍梨の霊に 供う 亡父葬儀の会送・霊前供物の礼、三五日に当り粗茶送付の旨</p>	<p>『言経脚記』 『舜旧記』 『隔奠記』 『隔奠記』 『隔奠記』 『手嶋家文書』 酒井家編年史料稿本 『醍醐寺文書』 『石井家文書』</p>
--	---	---

表3 史料にみる茶湯(チャトウ)

年月日	「茶湯」に関する記載内容	典拠史料
(貞和二(三六)年以前)	来月大師講、於当所者茶湯沙汰も無用意候	『金沢文庫古文書』
応安元 (三六)年一〇月一八日	毎月初一日十一日廿一日、洗米・茶湯・金剛經一卷・大悲呪等	『大徳寺文書』
応永三二(四五)年四月二七日	龍田宮祈祷之時、下行物事、廿文新代、茶湯ノ時也、一升寺水汲之	『播磨国鶴荘史料』
文安四 (四七)年四月吉日	七月八日ハ依為年忌千僧供養、為茶接待、仏通供養、偏為茶湯	『北野天満宮史料』
享徳二 (四五)年	北之疊ノ際ニ茶湯用意之。兼日不曳之。茶湯奉仕之者。石見也	『興福寺叢書』
康正三 (四五)年三月二二日	新供衆講問同音唯識論如何始行之、茶湯ハ御中屋ノ湯可用之	『大乘院寺社雜事記』
長祿四 (四六)年二月一二日	東大寺二月堂ニ令參籠、疊以下茶湯等澄春用意之	『大乘院寺社雜事記』
文明二 (四七)年二月八日	二月堂參籠、茶湯等事樋坊ニ仰付之了、加供百疋送堂司方	『大乘院寺社雜事記』
文明七 (四五)年正月三〇日	正月懸納下注文事、上御所様參御下行、式百文、御茶湯所參御炭	『蜷川家文書』
文明一〇(四七)年一二月二五日	十月十四日泰澄大師講法事、茶湯ハ衆僧一之役	『越知神社文書』
文明一六(四八)年三月一日	高山八講、新葉師寺堂衆方料理、茶湯	『多聞院日記』
文明一六(四八)年五月二二日	四恩院千部論始、茶湯之事、茶湯番初日ノ結日、茶具足、後夜茶湯用意	『多聞院日記』
文明一七(四九)年七月二三日	祈雨、茶湯ハ東林院可沙汰之由	『大乘院寺社雜事記』
永正四 (五七)年九月一二日	学侶分同音論在之、茶湯者唐院奉行所沙汰之	『多聞院日記』
永正一七(五〇)年	佛殿供茶湯・洗米、焚香	『瑞石歴代雜記』
享祿元 (五六)年一月二九日	茶湯器、三対	『大徳寺文書』
享祿四 (五三)年七月二九日	茶湯器 壹対	『大徳寺文書』

天文四 (一五五)年五月二日	大佛殿広目天宝前、雨乞、茶湯者西廻廊ニ幕ヲ引テ、納所ヨリ沙汰	『東大寺叢書』
天正一一(一五三)年正月五日	月齋朝齋、茶湯	『兼見卿記』
天正一二(一五四)年	茶たう(茶湯)たい(白カ)一ツ	『北野天満宮史料』
慶長一七(一六三)年二月二六日	無量一院殿御年忌、別儀一袋、御茶湯奉備	『舜旧記』
元和元(一六五)年八月一日	板伊州女中当社へ為参詣也、俄予柿・茶湯已下御社へ持上成	『舜旧記』
寛永七(一七〇)年一月六日	忌日、桃齋西堂、於当庵茶湯・仏供備之了	『舜旧記』
寛永八(一七〇)年一月六日	忌日、桃齋西堂、備茶湯・令焼香了	『舜旧記』
寛永一八(一七四)年四月一九日	けう水桶老つ・茶湯たご壺荷・柄杓二本	『東大寺文書』
承応二(一六五)年一月	五斗 千部論茶湯方	『春日大社文書』
明暦二(一六五)年一〇月一八日	前藩主光高正室逝去、茶湯寺仰付	『瑞泉寺文書』
万治元(一六五)年二月五日	二百五十年忌之宿忌、佛壇、茶碗之盛物六个、茶湯三具足	『隔笈記』
正徳四(一七四)年二月一九日	源立院十七回忌に付茶湯執行に成	『宇土細川家文書』
明和八(一七七)年	心樹院法事茶湯一卷	『国文学研究資料館和古書』
安永二(一七三)年	宣光院様御三回忌御茶湯留帳	『国文学研究資料館和古書』
安永三(一七四)年	善良院拾七回忌茶湯執行一卷	『国文学研究資料館和古書』
安永四(一七五)年	心樹院法事茶湯一卷	『国文学研究資料館和古書』
安永六(一七七)年	宣光院殿七回御忌御茶湯留	『国文学研究資料館和古書』
天明三(一七三)年	心樹院法事茶湯一卷	『国文学研究資料館和古書』
天明七(一七七)年	宣光院殿拾七回忌御茶湯留	『智鏡尼上座遺訓』
寛政四(一七五)年正月	御先祖の御命日には速夜より、茶湯壺供等を献上せよ	『国文学研究資料館和古書』
寛政七(一七五)年	宣光院殿二十五回御忌御茶湯留	『国文学研究資料館和古書』
寛政九(一七七年一月)	靈飯茶湯回向のため上畑二畝・金一両寄進	『群馬県立文書館所蔵史料』
享和三(一八〇)年	宣光院殿三拾三回御茶湯留	『国文学研究資料館和古書』
文化四(一八七)年	供物としての「茶湯」、死者に対する「霊前茶湯」の儀	『若松風俗帳』

<p>文政六 (一八二三年)五月九日 文化文政年間七月一三日</p> <p>天保一五(一八四四年) 弘化二 (一八四五年) 嘉永四 (一八五二年) 安政五 (一八五四年) 慶応四 (一八五八年)七月二〇日 慶応二 (一八六〇年)初演</p> <p>年月日未詳 年月日未詳 年月日未詳</p>	<p>金沢藩、前田綱紀の百回忌茶湯を江戸広徳寺に修す 今晚・明晩共ニ茶湯可致事、準備、道具類、「茶湯茶椀」</p> <p>梅園院法事茶湯一卷 梅園院様百回御忌御茶湯留 天目山開帳に付茶湯釜借用 心樹院法事茶湯一卷 慎徳院様拾三回御忌御法事ニ付御茶湯御茶上林家より差上申 候書付</p> <p>仏壇へ茶湯をして寿命長久守らせたまへと、佛へ向つて願ひ なさん</p> <p>真珠庵宿忌、一休示寂、「香華・燈燭・茶湯」を備う 本尊之御前立位牌、壇上打敷一枚、三具足、縁高茶湯器斗之事 弘法大師御茶湯日</p>	<p>『加賀藩史料』 『郡上郡赤谷村慈恩寺鐘 山月鑑』 国文学研究資料館和古書 国文学研究資料館和古書 『甲州文庫』 国文学研究資料館和古書 内閣文庫所蔵史料</p> <p>『浪白間橋込打船』 『大徳寺文書』 『西福寺文書』 『織田文書』</p>
---	---	---